

【ステホーの五輪観戦連日で 金獲得は17個見る】

TOKYO2020 オリンピックで日本は27個の金メダル獲得だった。東京都知事が声高に推奨しているステホー（ステイホーム）で17個の金メダル獲得の瞬間を観た。金メダルを逃したシーンも見てるので、コロナに感染する暇はなく五輪観戦の日々は手に汗握る瞬間の連続だった。

ぼけ防止には日記を書いたり、記録を残したりすることが極めて有効という先生方も多いようなので、それに従い順に列挙すると以下の通りである。（写真はネットから）

- 7月24日（土） 高藤（柔道男子）
- 7月25日（日） 大橋（水泳女子）、阿部詩（柔道女子）、阿部一二三（柔道男子）
- 7月26日（月） 水谷・伊藤（卓球混合）、大野（柔道男子）
- 7月27日（火） 永瀬（柔道男子）、ソフトボール
- 7月28日（水） 大橋（水泳女子）、新井（柔道女子）、橋本（男子体操個人総合）
- 7月29日（木） 濱田（柔道女子）、ウルフ・アロン（柔道男子）
- 7月30日（金） 素根（柔道女子）
- 8月3日（火） 橋本（体操個人・鉄棒）
- 8月6日（金） 喜友名（空手 男子形）
- 8月7日（土） 野球（侍ジャパン）



よみうり生活応援隊から東京オリ・パラへの感想や期待についてのアンケートが来たので、メ切りギリギリで返信。すると15日の朝刊に「パラへの熱い期待」としてコメントが掲載された。

『東京都の野本浩一さん（69）は、パラリンピックの名称が初めて使われた1964年の東京大会当時、中学生だったが、パラリンピックについての記憶はないという。「報道や参加国の増加などに伴い、2008年の北京大会あたりからパラリンピックを意識するようになりました」と語る。』（注：60代最後のマスコミでのコメント。来月から70代なのだ）

さあ、今度はパラアスリートのメダル獲得を期待してステホーテレビ観戦の続きだ。

柔道に水泳卓球ソフト体操 テレビ皆勤野球も金よ
スケボーは見ることもないステホーで 馴染みの競技見る五輪かな
感染を避けてステホーで観戦し 金銀銅に欣喜雀躍

【数独の父69で死亡する 81まで生きたかったか】

「数独の父」と称されている鍛冶真起さんが死去。69歳とのこと。生年が1951年なので同学年の人だったのか。面識はなかったが同氏が始めたパズル通信「ニコリ」は発刊当初1980年頃からゲーム玩具店で見かけたものだった。同誌には面白いゲームも紹介されているので、今でも時々借用させて頂いている。

鍛冶氏はアメリカのパズル雑誌で見つけた「ナンバープレイス」パズルを「数字は独身に限る」と改称して紹介した。それをニュージーランドのパズル愛好家が「SUDOKU」と言う名でイギリスの新聞で紹介した。そこから世界的に人気を博すことになった。

世の中こんなふとした偶然の繋がりで大きなブームが起こることが多い。それにしても「数独」は「SUDOKU」となり、「ナンバープレイス」（略して「ナンプレ」）も世界に広がっている。

僕のゲーム仲間には鍛冶さんと交流があった人もいた。同学年だったんだから会って話してみたかったなあ。



5	3		7				
6			1	9	5		
	9	8				6	
8				6			3
4			8	3			1
7				2			6
	6				2	8	
			4	1	9		5
				8			7
							9

数独の父は同年生まれとか 会えば話は弾んだかもと
アメリカの雑誌は時に知恵袋 活用すればいいビジネスに
楽しみは一人時間があるときに 数独解いて悦に入るとき

「数独の父」鍛冶真起さん死去 69歳 パズル会社「ニコリ」設立



鍛冶さんは、印刷会社での勤務などを経て1980年に友人らと日本初のパズル雑誌「パズル通信ニコリ」を創刊し、その3年後にパズルの出版社「ニコリ」を設立しました。



そして1984年に、1から9までの数字を、縦と横、それに9つのブロックに重なら

ないように書き込む数字パズルを「数独」と名付けて紹介し、2000年代に海外の新聞社で取り上げられたこと

をきっかけに、人気に火がつき、世界的に知られる人気パズルとなりました。

鍛冶さんは、数独以外にもさまざまなパズルを考案し、日本におけるパズルの普及に尽力してきましたが、先月、およそ40年にわたり務めたパズルの出版社の社長を退任し、今年10日、東京都内の自宅で胆管がんのため亡くなりました。

69歳でした。

いまや世界でも「SUDOKU」として定着し、2億人以上が楽しんでいるとされる数独。鍛冶さんが日本で世に出したのは84年ごろのことだ。

■「数独」名前の由来

9×9の正方形の枠に、3列3段のブロックがあり、1から9までの数字を重複しないように埋めていくシンプルなパズルだが、もとはアメリカの雑誌に掲載されていた「ナンバープレイス」というパズルだった。これを鍛冶さんが見つけ、雑誌で紹介した形だ。

ひと桁の数字で、さらに重複しないことから「シングル…独身」などと発想を広げ「数字は独身に限る」という風変わりな名前を付けた。その後、略されるようになり「数独」の呼び名が定着した。

国内で人気を広げていった数独だが、先に爆発的なブームが起きたのは海外だった。

きっかけは2004年に、数独が大好きだったニュージーランド人がイギリスを代表する新聞社「タイムズ」に自分で考えた数独を持ち込んだこと。紙面で「SUDOKU」として取りあげられると、その面白さから一躍、欧米で人気となった。その後、06年に“逆輸入”される形で日本でも人気に火がついた。

2006年の「ニューズウィーク日本版」で「世界が尊敬する日本人100人」に選ばれた鍛治さん。数独以外にも数多くのパズルを発表し続けた。海外では「Godfather of Sudoku (数独の父)」と呼ばれることもあり、世界中を渡り歩いて数独やパズルの面白さを伝え続けた。

アメリカのパズル誌に載っていた「Number Place」というパズルを、パズル制作会社[ニコリ](#)の代表取締役 [鍛治真起](#)が、名称だけ「数字は独身に限る」(略して、数独)と変えて日本で発表したことが始まりで[219](#)、同社の関与する媒体で使用される名称である。同社によって[商標登録](#)^[4]がされており、日本国内においては同社が制作に関与していないものについては「ナンバープレース」等の表記が使われている。

